地域医療人育成センターの活動について

勝　部　琢　治

キーワード：人材育成、医学教育、地域巻き込み型

（雲南市立病院医学雑誌　2019; 16(1): 112-115）

はじめに

合言葉は「地域の医療人は地域で生み、育てる」。

医師、看護師を始めとする医療職を育成することを目的に「地域医療人育成センター」は、平成21年４月に開設された。この育成センターが設置された背景は、平成16年に導入された新臨床研修制度が主な要因となり、大学医局で研修する医師が減少し、大学医局からの医師引き揚げにより常勤医師減少した。当院のような地域病院は大学からの医局人事に頼っていたため、地域医療に大きな打撃を与えることになった。その結果、平成14年度に34名いた常勤医師は、平成22年度には17名と８年間で半減し、病院経営も落ち込むことになった（**図１**）。

当時、この医師不足の状況を改善するため、国や島根県などは医学部の定員を増やし、地域枠推薦制度の導入や、島根大学内に島根県の寄附講座を設けたりしたが、その時点では即効性はなく、病院の厳しさは増していった。

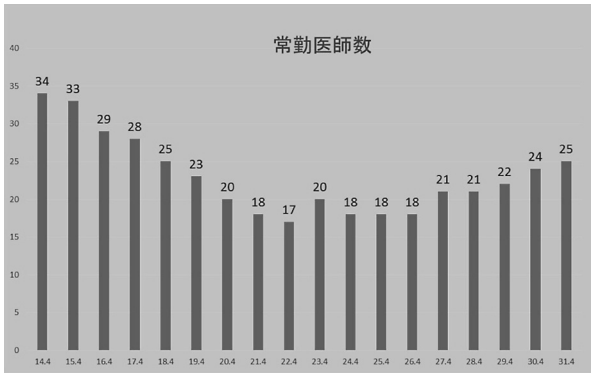

図１　常勤医師数の推移

このような状況の中、今後、この地域に必要な医療人材は地域で生み育てていく、人材育成の取り組みを推進しなければ地域医療は崩壊するとの思いから、この「地域医療人育成センター」を開設した。大谷順院長（当時）がセンター所長として陣頭指揮を取り、当院の最重要施策としての取り組みを開始した。

この地域医療人育成センターの主な事業内容は、大きく分けて次の４つで、①地域医療を目指す医師、看護師を始めとする医療職の育成、②医学生の地域医療実習、③研修医の指導及び研修プログラムの策定と充実、④小学生・中学生・高校生の職場体験、である。開設時と現在とでは医療状況も変わり、新たに行っている事業や中止した事業もあるが、現時点で行っている事業を紹介する。

①地域医療を目指す医師、看護師を始めとする医療職の育成

平成18年に、島根大学医学部医学科に特別選抜（地域枠推薦）が設けられた。この地域枠推薦は、島根県内の僻地（松江市・出雲市以外）出身者に限った推薦枠で、県内の医師偏在を解消する狙いがある。雲南市は毎年、県内東部の高校へ募集を行い地域枠推薦での島根大学医学部への入学を後押ししている。地域枠推薦を受験するには、医療施設で５日間、福祉施設で３日間の現場体験が必須であり、当院では受験希望者全員の医療体験を受入れている。そして、医学部に合格した後は、地域枠学生・医師に対し、毎年、市長の参

雲南市立病院地域医療人育成センター、同事務部企画財政課
著者連絡先：勝部琢治　雲南市立病院事務部企画財政課〔〒699-1221 雲南市大東町飯田96-1〕
E-mail: hospital-kikakuz@city.unnan.shimane.jp

加のもと交流会を開催し地元の医療の状況や学生の近況報告を行っている。この交流会は平成22年から毎年開催し、昨年で10回目を迎えた。この交流会により、学生・医師間の縦の繋がりが醸成され、「チームうんなん」という愛称のもと、結束がより強固になってきたと感じている。現在では、２名の地域枠医師が当院で勤務している。２名はモチベーション高く、これから次々と勤務する後輩に対しロールモデルとなっており、この雲南の医療に大きく貢献している。現在の地域枠医師・学生は24名であり、今後、この地域枠推薦が当院の医療提供体制に大きな役割を担っていくことになると確信している（**表１**）。

また、医師不足が叫ばれる中、７対１看護導入による、看護師不足も顕著となってきた。当院も新人看護師が都市部へ流出し、看護師募集しても応募がなく、特に新卒看護師の採用がない年が続き、慢性的な看護師不足の状況に陥っていた。その中、島根県では平成20年に石見高等看護学院に地域枠推薦制度を導入した。これは、県内へき地の市町村長の推薦により受験をすることが可能で、卒業後は市町村長が指定する地域で勤務することを確約できる者が対象となっており、雲南市が募集、面接等を行ってきた。これまで22名が合格した（看護師16名、学生６名）。そのうち現在、10名が当院で勤務し活躍中である。また、当院では看護師確保対策として看護師奨学金を独自に設け（現在は募集停止）、現在14名が当院で勤務している。そのほかに、県内看護学校の臨地実習施設として、母性看護、在宅看護を中心に毎年30名程度の看護学生を受入れている。

②医学生の地域医療実習に関すること

島根大学医学部は、大学病院では学ぶことが難しいプライマリ・ケアの実際を体験し、医学生の地域医療に対する動機付け向上を目的に、平成18年度から、医学部６年生に対して県内45の医療機関（出雲市・松江市以外のへき地）にて３週間の地域医療実習を必須科目で行ってきた。平成24年度からは、５年生に対して実施し、６年生には選択科目として実施している。当院も平成19年度から医学生を受入れ、少子高齢・人口減少が進むこれからの日本の医療モデルケースの中で、地域基盤型医学教育（Community Based Medical Education、COME）を意識した地域医療実習を提供している。医療の基本（全人的医療）を学び、生活者の「命の物語」を支える医療を感じてもらえることを期待している。なお、平成19年度から平成30年度までの12年間で269名（延べ372週間）の学生を受入れた（**表２**）。

③研修医の指導及び研修プログラムに関すること

初期臨床研修では、研修医は２年次に必須科目で地域医療を最低１ヶ月間研修することになっている。当院は臨床研修協力病院（施設）として、平成19年から受入れを開始した。はじめは、研修医から選ばれない病院であり、研修する研修医が少ない年が続いたが、指導医（特に外科医師）を中心に、On-the-Job Trainingで指導を行い、さらに多くの手技を経験できるという

表１　雲南市出身の地域枠推薦の医師及び医学生（平成31年４月現在）

島根大学医学部（９人）						医　師（15人）		
１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生	初期研修医	専攻医	６年目以降
２人	１人	３人	２人	１人	０人	１年目 ４人	医師３年目 ０人	医師６年目 １人
						２年目 ５人	医師４年目 ２人	医師７年目 ０人
							医師５年目 ２人	医師８年目 １人

表２　島根大学地域医療実習受入実績

	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
受入人数（実人数）	18	21	18	24	24	33	24	26	17	20	24	20
延べ受入週数（week）	18	21	19	25	25	37	30	36	32	40	43	46

ことで、少しずつ口コミで希望する研修医が増えてきた。病院経営が厳しくなってきた時期に、この地域研修で研修医を受入れることで、病院は活気付き、またフォローする看護師も生き生きとした表情で接する機会が増え、病院の雰囲気が良くなってきたように感じた。現在は、院内での研修（外来、救急外来、入院管理など）以外に、訪問診療、掛合診療所研修も提供し、救急、外来、入院、在宅とカテゴリ別に医療を研修することが可能となった。また、ケアマネージャー、訪問看護、訪問介護、などの介護・福祉分野における多職種連携の実際を学ぶ機会も設けている。そして、地域住民との連携による育成として、暮らし体験や住民サロン、医療出前講座への参加など、この雲南地域の住民と接する機会と生活の一部を体験する機会を増やしている（**表３、図１**）。

新たな専門医制度が平成30年から開始となった。制度の詳細はここでは述べないが、研修医にとっては大きな変革となるに違いない。これまでの学会によるカリキュラム制から、日本専門医機構認定の病院群によるプログラム制への変更で、地域医療にも影響を与えることになると思う。当院も基本領域の「総合診療」については基幹型としてプログラムを申請し認定を受けた。初年度は応募者がなかったが、平成30年１名応募があり、平成31年４月より専攻医として研修を開始した。今後、この総合診療を核に、積極的な人材育成と確保を図っていくことが、この雲南の地域医療を支えていくことになると考える。

④小学生・中学生・高校生の職場体験に関すること

これから少子化時代を本格的に迎え、人材確保が困難になってくる時代に向けて、将来、この地域を支える医療従事者を育て続けることが重要になってくる。そのためには、子どもの頃から医療に興味を持ってもらう取組みを継続的に行うことが重要である。小学生に対しては、島根県の地域医療教育推進事業とふるさと教育を連携させた形で、こちらから小学校へ出向き医療の話や簡単な体験を行ってもらっている。少しずつではあるが、年々小学校からの依頼も増えてきている。中学校は、雲南市独自のキャリア教育カリキュラムとして「夢発見～職場体験～」があり、３日間、約10名程度受入れ、院内各部署を体験している。また、夏休みには中学生医療現場体験セミナーを開催し、希望職種の現場で体験ができるよう受入れている。高校生は、高校生医療現場体験セミナー（年２回）、一日助産師体験を開催し、また大東高校、三刀屋高校の総合学習による地域課題研究に協力している。現在、年間の体験者数は、小学生約100名、中学生約50名、高校生約100名、職場体験を行っている。そのほかに、雲南市の「うんなん医療見学ツアー」、「イイトコ発見プロジェクト」など、行政主催のイベント等も連携しながら取組んでいる（**図２**）。

以上、大きく４つ柱を中心に事業を展開している。

この地域医療人育成センターを設置して10年が経過した。少しずつではあるが、取り組みの成果が現れてきているように感じる。人材育成には時間も労力もかかるが、「人材育成、医学教育のない病院には人が集まらない」と考える。当院のような中山間地の病院がこれから生き残るには、人材育成と教育の質向上が不可欠と考える。怒涛の10年間であったが、確かな手ごたえを感じつつ、これから10年を見据えた人材育成がより重要になってくるものと考える。

表３　地域研修受入実績

	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
受入人数（実人数）	1	0	3	8	9	11	14	13	9	12	13	15
延べ受入月数	1	0	2.5	13	11	15	15	14	9	13	10.5	13.5
複数月（実人数）	0	0	0	3	1	2	1	1	0	1	0	0
備考（内訳）			2week:1名	2ヶ月:3名 3ヶ月:1名	3ヶ月:1名	4ヶ月:1名 3ヶ月:1名	2ヶ月:1名	2ヶ月:1名		2ヶ月:1名	2week:5名	3week:5名

図１　地域医療研修終了式

図２　小学生ふるさと教育、島根県メディカルアカデミー

Activities of the cultivation center for regional medical human resources in Unnan City Hospital.

Takuji Katsube

Cultivation center for regional medical human resources, Division of planning and finance, Unnan City Hospital
Correspondence: Takuji Katsube, Division of planning and finance, Unnan City Hospital〔96-1 Daito-cho Iida, Unnan, Shimane 699-1221, JAPAN〕
Telephone: 0854-47-7500 / Fax: 0854-47-7501
E-mail: hospital-kikauz@city.unnan.shimane.jp